

子連れでロンドン

London with the Kids

小宮 彩加

Ayaka KOMIYA



私は昨年、勤務する大学から1年間のサバティカルを認められ、ロンドン大学キングズ・コリッジの訪問研究者としてロンドンで在外研究生活を送ってきました。イギリスは前にも留学で行ったことがありますが、今回は3歳の娘を連れての訪英でした。娘は現地のナーサリーに週4回通わせましたので、その4日間だけはともかく図書館に行ったり、大学に行ったりと研究に費やし、残る3日は娘と一緒に観光したり、美術館に行ったりして過ごしました。小さな子供を連れての在外研究は大変なこともありました。娘の友達のお母さんたちと仲良くなったり、子供と一緒にできないことをしたりして、それまで知っていたイギリスとは違う側面をみることができましたように思います。

子連れでロンドン生活をしてみて分かりましたが、ロンドンには子供と一緒にいくと楽しいところが実にたくさんあります。それも、子供だけに楽しいのではなく、一緒に行った大人も楽しめるのです。そこで、私は子供と一緒にロンドンに行く

きどのような楽しみ方があるかについて書きたいと思います。お子さん、あるいはお孫さんを連れてロンドンに旅行する際の参考にしていただけると幸いです。

まず、ロンドンで子供と一緒に行くところとして一番お勧めなのはミュージアムです。イギリスのミュージアムは無料のところが多い上、大体どこのミュージアムでも子供向けの無料のワークショップがあります。子供向けのプログラムで私たちが一番気に入って通い詰めたのが、ナショナル・ギャラリーのアート・ワークショップです。ナショナル・ギャラリーでは、毎週日曜日(8月中は平日も)に子供向けワークショップが開かれます。ワークショップは年齢で分かれており、渡英したとき3歳で途中で4歳になった娘は、最初のうちは「マジック・カーペット」という3歳から5歳の子供向けのプログラムに参加し、途中からは5歳以上の子供向けのアート・ワークショップに参加するようになりました(年齢は推奨年齢なので、5歳以上でもマジックカーペットに参加できるし、5

歳以下でも5歳以上向けのワークショップに参加できます)。

「マジック・カーペット」というのは、集合場所で「館内で走らない、絵に触らない、騒がない」などの注意事項を確認した後、ギャラリー内のどこかにあるはずの魔法の絨毯を探して歩きます。絨毯が見つかったら、それを1枚の絵の前に広げ、そこに座って、「アブラカダブラ！」と絨毯に魔法をかけてフワリと絵の世界に入った気分になって、学芸員の語る絵の物語に耳を傾けるというものです(英語が全く分からないうちは、私がすぐ横に座って同時通訳をしていました)。ティツィアーノの『バックラスとアリアドネ』や、一つ目の巨人キ

ュクロープスから逃げるオデュッセウスの絵、聖ジョージがドラゴンを退治している絵など、毎回、物語性の高い作品が選ばれるので、子供も大人も絵の世界にぐっと引き込まれて、30分があっという間に過ぎてしまいます。

5歳以上向けの「アート・ワークショップ」もまた最高に素晴らしいものでした。こちらは「マジック・カーペット」と比べて、もう少し集中力のある年齢向けで、時間も2時間と長めです。このプログラムは、集合場所に集まってから、①ギャラリーに入り、その日のために選ばれた1枚の絵をじっくり見る、②絵の前でスケッチする、③アトリエに行き、



マジックカーペットをひろげる子供たち



ゴッホのような黄色を作る
デモンストレーション

絵を描いたり，工作をしたりする，
という3部構成になっています。

例えば，ゴッホの「ひまわり」の
絵のときには，「ひまわり」の前で自
身も画家である先生がゴッホの色使
い，構成，タッチ，そしてゴッホと
いう画家について話をしてくれました。
その際，ただ説明するのではなく，
なるべく子供から面白い答えを
引き出そうと色々な質問をしてくれ
るので，子供たちも積極的に手を挙
げ発言します。そうやってじっくり
とゴッホの絵を見た後で，その場で，
鉛筆と画用紙が渡され，絵を見なが
ら花瓶や花の様子を絵に描くのです。
それから，その絵を持ってアトリエ
に場所を移します。

各テーブルには絵の具を出した紙
皿が用意されていました。まずは画
家の先生が見本を見せてくれ，その
後，子供たちもテーブルに戻って，
画用紙に色を塗っていきます。ゴッ
ホの色になるべく近づくように，黄
色に黄土色や白色の絵の具を混ぜて
から，色を塗ります。さらに，花を
塗るときには，特殊なジェルを絵の
具に混ぜてくれ，油絵のようなボツ
テリとした質感の，ゴッホのよう
なひまわりの花ができるようにしてく
れました。ゴッホの絵を注意深く見
てから描いたので，普段描く絵とは
全く異なる，ちょっぴりゴッホ風の
素晴らしい絵が完成し，娘も大満足
でした。



完成したゴッホ風の「ひまわり」の絵
を持っているところ

別の日には、ターナーの舟の絵が取り上げられました。ゴッホのときと同様に、ターナーの描いた帆船の絵の前で、色や構図にも注目しながら画家の先生の話聞いてから、絵の前で渡された紙に鉛筆で舟の絵を描きます。その後、その絵を持ってアトリエに行き、サンドイッチを入れるようなアルミの箱と粘土と画用紙と棒を使って舟を作るという作業をしました。アルミの箱が舟になっているので、家に持ち帰った後はお風呂の中で浮かべて遊ぶこともできました。

ナショナル・ギャラリーのアート・ワークショップは人気があり、定員がいっぱいになってしまうこともしばしばありました。15分くらい前に行けば大丈夫でしたが、例え満員でワークショップに参加できなくても、子供と一緒に絵を見ながらできるアクティビティ・ブックが受付に売っていますし、自分の色鉛筆と画用紙を持って行けば館内で自由にスケッチすることができます（ただし、クレヨンやマジックは不可）。お気に入りの絵を見ながら絵を描くということは、日本の美術館ではなかなかできない贅沢でしょう。ワークショップのない平日でも、よく私は娘とおにぎりを持ってナショナル・ギャラリーに行き、のんびりとした時間を過ごしていました。

もうひとつのお勧めのミュージアムは、ヴィクトリア・アンド・アル

バート・ミュージアム (V&A) です。ここの子供向けアート・プログラムは、バックパックです。いくつかのバックパックの中から選ぶことができますが、小さな子供にも十分楽しめるので最初に勧められたのは「ガラス」の展示室用のバックパックでしたのでそれを例に説明します。バックパックを背負ってガラスの展示室に行き、そこでバックパックを開けると、中に番号の刺しゅうされた袋がいくつか入っているので、それらを順番に開けていくのです。「1」の袋には、ガラスの原料である石とその粉の入った容器が入っていました。「2」の袋には色のついたアクリル板が何枚か入っていて、黄色と青を重ねると緑になったり、赤と青を重ねると紫になったりするのが分かるようになっていました。「3」の袋には目隠しが入っていて、指示に従いそれで目を覆ってから、「4」の袋に入ったオブジェを手で触って形を覚えた上で、目隠しを外して展示室の中から同じ形のガラスの容器を探すことをしました。オブジェの大きさ、形、突起の様子などの情報を手で触ることだけで収集し、頭に描いた形と一致するガラスを探すのですが、これはなかなか難しいことでした。そのチャレンジが好奇心をくすぐるのでしょいか、娘もとても楽しんでいました。

また、V&A に行ったときに、絶対にはずせないのが、ここのカフェで

す。イギリスの美術館のレストランやカフェは、どこも10年前に留学していたころと比べて格段に良くなっていましたが、世界で最初のミュージアム・カフェとしても有名なV&Aのカフェは、大規模な改修を経て、ひと際ゴージャスでした。モリス商会の手がけたステンド・グラスや壁のタイルはそのまま残しながらも、天井からぶら下がったモダンな球状の照明のおかげで華やかさが増しており、Benugoというお洒落なケータリング会社が提供するようになった食事の内容もよく、おまけに日曜日にはピアノの生演奏（しかも、非常

にドラマチックでアーティスティックなピアノ演奏）もあるので、このカフェは優雅に食事やお茶を楽しむ場所としてもお勧めです。

このほかにもロンドンには星の数ほどミュージアムがあり、そのどこでも子供向けのプログラムが用意されているので、事前にホームページでチェックしていくと良いと思います。小学生くらいの子供には、ナチュラル・ヒストリー・ミュージアムが一番人気のあるミュージアムで、夏休みには、入口に長蛇の列ができています。ここでは、Explorer's Backpack というのが子供用に用意さ



V&Aの「ガラス」用アクティビティをしているところ

れていて、探検家の帽子と双眼鏡とリュックがセットになっており、探検家になりきって館内を歩きまわり、リュックの中に入って紙に指示されているアクティビティをするというものでした。冬の間（11月以降）は、このミュージアムの前の庭に仮設アイススケートリンクが登場します。ナチュラル・ヒストリー・ミュージアムの立派な建物とクリスマスツリーとメリーゴーラウンドを眺めながらのスケートは、とても気分が良いものです（ここ以外にも冬場はスケートリンクがあちこちにオープンします。中でもサマセット・ハウスのリンクはティファニー協賛で煌びやかで人気がありました）。

小学校中学年以降であれば、ナショナル・サイエンス・ミュージアムが楽しいでしょう。ここにはあのロケット号の実物も展示されているので、大人でもワクワクしてしまいますが、子供の年齢に合わせて科学的で実験風の遊びができるエリアがあるので、子供も大好きなところですよ。また、サイエンス・ミュージアムはミュージアム・ショップも充実していて、大人も入れるくらいの巨大シャボン玉が作れるセットや、3Dの絵が描ける道具など、他には売っていない、おもしろくて教育的な玩具が売られています。

ミュージアムによっては、夏休み中などに「お泊り」できる企画もやっています。サイエンス・ミュージ

アムでは8歳以上の子供が参加できます。12歳以上の勇気ある子供であれば、大英博物館で「ミイラとお泊り」ということもできるようですよ（お泊りは保護者つきなので、「ミイラとお泊り」に参加する場合は大人も度胸のある大人でないといけません）。

子供連れで楽しめる、ロンドンならではのもう一つのことは、舞台鑑賞です。日本では大抵の舞台が「未就学児入場不可」となっていますが、ロンドンでは推奨年齢はあるものの、「入場不可」ということはほとんどありません。例えば、Royal Opera Houseのホームページには子供の入場について、“Children are welcome at the Royal Opera House.”とした上で、“The Management reserves the right to ask patrons to remove infants or children if they are causing a disturbance.”と書いてあるのです。就学児、未就学児にかかわらず、子供にも色々な子供がいますので、このように書くのが最良の策だと思います。幸い、娘も私に似て舞台を観るのが大好きなので、ロンドンでは一緒にたくさん舞台を観てくることができました。

その中でも特に私がお勧めしたいのは、リージェンツパーク内の夏期限定の野外劇場 Open Air Theatreです。2009年には『テンペスト』を、2010年の夏にロンドンを再訪したときには『マクベス』を観てきましたが、いずれも素晴らしかったです。これらは「6歳以上、大人まで」楽

しめるように作られていたのですが、セリフはシェイクスピアのままです。しかし、『テンペスト』では観客が嵐の音を作るのに参加し、『マクベス』では休憩時間中に配られた月桂樹の小枝を振って観客が「森が動く」ところを担当するという具合に見事に観客を巻き込むので、子供でも飽きることなく夢のような初シェイクスピアを楽しむことができます。まさにイギリスの演劇の成熟度と懐の深さを実感した舞台でした。

ミュージカルにも子供と一緒に楽しめるものは幾つもあります。ストレートな演劇とは違い、歌と踊りがたくさん入るので、それだけでも楽しめると思います。現在、ロンドンで上演中のミュージカルのほとんどが映画版もあるので、ロンドンに行く前にDVDで映画を観ておいて、子供にもストーリーを予習させておくとよいでしょう。

娘が一番好きなミュージカルは『ビリー・エリオット』でした。これは同名の映画（邦題は『リトル・ダンサー』2000年）を観て感激したエルトン・ジョンが映画の作者に声をかけ、エルトン・ジョン自らがすべての楽曲を作り、生まれたミュージカルです。2009年にアメリカでトニー賞を総なめにしただけあって、映画と同じ感動的なストーリーとビリーの天才的なダンスが生で観られる、痺れる舞台です。

2011年の1月までにロンドンを訪

れるのであれば、『オリバー・ツイスト』のミュージカル版『オリバー!』を観ることができます（2011年1月で終演予定）。こちらマーク・レスター主演の映画『オリバー!』です。すっかり有名になったミュージカル作品なので、歌もよく知られたものばかりです。“Food, Glorious Food!”や“Consider yourself”など、思わず一緒に歌いたくなってしまいます。カーテンコールのときには、娘もみんなと一緒に、オリバーやナンシー、ドジャーには拍手喝采し、ビル・サイクスに「ブー!」とブーイングをしていました。

私の一番のお気に入りには『マンマ・ミーア』です。こちらは1999年初演の舞台が先で、その後2008年にメリル・ストリープ主演で映画化され話題になりましたが、ABBAの歌と踊りで観客も一緒になって大いに盛り上げられるミュージカルです。日本では一部の人にしか知られていませんが、ABBAはイギリスでは未だに老若男女に愛されており、日ごろからあちこちでABBAの曲は耳にします。

Royal Opera Houseで観るバレエも、シーズン中であれば、是非観ることをお勧めします。クリスマス・シーズンに観た『くるみ割り人形』は、華やかで夢のようなバレエでした。

イギリスは日本よりもインターネットが進んでおり、劇やミュージカルのチケットはすべてオンラインで

購入できます。日本にいる間にオンラインでチケットを購入しておいて、ボックス・オフィスで当日受け取ることができるので大変便利です。当日、購入に使ったクレジットカードを提示しなくてはいけないということだけ気をつければ、あとはとても簡単です。

イギリスでは「子供向け」というのは、決して「子供だまし」ではありません。日本では子供向けのものと大抵大人が我慢をすることを意味しますが、イギリスの子供向けのものは、子供だけでなく、子供以上大人も楽しめるようになっています。*The Gruffalo* という、20年前の出版以来、1000万部以上売れているベストセラーの絵本を舞台化したものを観に行ったときに驚いたのですが、登場するのはネズミ、キツネ、蛇、フクロウなどの動物たちなのに、着ぐるみは全く使わず全て見立てでした。例えば、がらがら蛇はマラカスを持ったサンボダンサーの格好、キツネはニッカーボッカーを履いてハンチング帽をかぶった田舎紳士のような服装でした。それでも子供たちはすぐに舞台の世界に引き込まれていました。そして、子供用のストーリーであっても、舞台自体はととてもアーティスティックで上質なものであり、心底感服しました。このようなものを子供のころから観て育つから、舞台を観る目が養われるのだなと実感しました。

今回はミュージアムと舞台についてのみ書きましたが、ロンドンは子供にとっても優しい街なので、他にも子連れで楽しめることはたくさんあると思います。食事も、ミシュランの星のついているような高級レストランでなければ、大抵のレストランがKid's Menuという子供専用メニューを用意しています（大抵、フィッシュ・アンド・チップスカトマトソースの Pasta、デザートにアイスクリーム）。メニューは、それ自体が塗り絵や迷路になっていて、食事を待っている間、お店が用意しているクレヨンや色鉛筆を使って遊ぶことができるようになっています。子供の食後の飲み物には、最近すっかり定着したベビチーノという飲み物がお勧めです。もともとロンドンではPizza Expressというイタリアンのチェーン店が始めたものなのですが、今ではメニューに載ってなくても、子供が“Can I have a babycino?”と注文すれば大方のお店で出してくれます。要するに、やや温めのフォーム・ミルクをデミタスカップに入れて、上にココアを振りかけたものなのですが、それを「ベビチーノ」というちょっと背伸びした名前をつけるというのは何とも素敵なおアイデアだと思います（帰国後、日本で試しに一度注文してみたら、「ホットミルクですね」と味気なく言われてしまいました）。

イギリス人というのは日本人と同

じで島国根性が強く、初対面の人や外国からきた人とはすぐに打ち解けない国民、というイメージを私はずっと持っていました。子供に対しては大変優しいのに驚きました。ロンドンで娘と一緒に地下鉄に乗ると、イギリス人は必ずサッと席を譲ってくれます。お礼を言って席に座った後、娘がニコニコして誰かを見ているなと思うと、向かいの席のおじさんが変な顔をしてみせてくれていることがよくありました。お気に入りのキラキラ光る赤い靴を履いていると、「I love your shoes!」と必ず誰かが娘に声をかけてくれ、そうすると大喜びで娘も「Thank you. My favourite Dorothy shoes!」と答え、たどたどしくも英語で会話が始まることがしょっちゅうありました。近所の八百屋さんに娘を連れて行くと、店のお

じさんは必ず娘に 'Hello, gorgeous! How are you today?' と話しかけてくれ、バナナを1本プレゼントしてくれました。残念ながら日本ではあまり経験したことはありませんが、社会全体で子供を大事にしようという温かさを感じるのがしばしばありました。

このように、ロンドンは大人にとっても素敵な街ですが、子連れで訪れる旅先としても魅力的なところなのです。もし、子供が大きくなるまでロンドンに行くのは待とうと思っていらっしゃるのでしたら、是非その考えを改め、子供が小さいうちからロンドンを訪れてみてください。子供のうちから、あるいは子供であるからこそ楽しめることがロンドンにはたくさんあるのです。